第14回

神奈川大学高大連携協議会フォーラム

2019年度入学の高校1年生から「探究」という名の科目がスタートした。学習指導要領の改訂によって、これまで「総合的な学習の時間」として実施されてきた科目が「総合的な探究の時間」に変更されたものだ。第14回神奈川大学高大連携協議会フォーラム（主催：神奈川大学高大連携協議会）は、『「探究のプロセス」を考える―探究活動の実践を通して―』をテーマに8月2日に開催された。会場の神奈川大学横浜キャンパス・セレストホールには多くの高校・大学関係者が集まり、基調講演、実践発表に熱心に耳を傾けた。講演や発表の概要を紹介する。

（文中敬称略）

司会：神奈川大学人間科学部4年 今川 玲公

開会あいさつ

自ら課題を発見し、解決するための資質、能力を

今回の本フォーラムのテーマ「探究のプロセスを考える―探究活動の実践を通して―」に向け、ご出演いただく先生方とも綿密な打ち合わせをさせていただき本日を迎えることができました。ご登壇いただく皆さん、ご準備いただいた皆さん、誠にありがとうございました。

昨年3月に示された、新しい高等学校学習指導要領では、総合的な探究の時間への対応が求められています。これは、「小・中学校における総合的な学習の時間の取り組みの成果を生かしつつ、より探究的な活動を重視する視点から、位置付けを明確化し直すことが必要と考えられる」という中央教育審議会の答申に基づくもので、探究の見方、考え方を働かせ、横断的総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方、生き方を考えながらより良く課題を発見し、解決をしていくための資質、能力を育成することが目標です。

本日は、基調講演、実践発表を通じて、高等学校教育における諸課題について考え、今回のフォーラムを皆さまとともに探究学習の在り方、生徒の資質と能力を引き出す取り組みをしっかりと学ぶ機会にしてまいりたいと思います。

神奈川大学高大連携協議会会長
神奈川大学長
兼子 良夫

実践発表❶

生徒が自己肯定感高め、主体的に自律 対話重ね教師、地域も変容

課題は、次のステージにどうつなげるか

富士市立高等学校は、静岡県富士市比奈に所在する市立の高等学校です。2011年度に、富士市立吉原商業高等学校を改組・改称する形で開校しました。「総合探究科」「ビジネス探究科」「スポーツ探究科」の三つの科があります。ここで3年間指導主事として常駐し、学校改革に携わってきました。この間、探究的な学びの実現を目指し、さまざまな取り組みを行ってきましたが、その中で①基本理念②組織、分掌③カリキュラム・マネジメント④地域連携マネジメント⑤生徒、大人、地域の変容⑥探究からの気づきと課題についてまとめていきます。

富士市立高等学校における基本理念は「夢の探究と実現を全力で支援する学校」「信頼して生徒を任せられる学校」「富士市民に愛され、富士市の発展に寄与する学校」で、育てたい生徒像は「自律する若者」です。それを具現化するために、学校組織・分掌改変を行いました。基本理念をもとに体系化し、教員間の対話を繰り返しました。週一度の打ち合わせでは、生徒にどのような資質・能力を身に付けさせるのか、生徒のために何ができるのかを建設的に話し合いました。学校組織だけでなく、基本理念が教員間の共通理解となり教員同士が対話を続け変化し続けたことが、最も大切だったと感じています。

カリキュラム・マネジメントでは、総合的な学習（探究）の時間を軸に教科授業、行事等を体系化しました。総合的な学習（探究）の時間では、「序」（発想技法）・「論」（ディベート）・「活」（市役所プラン）・「究」（個人テーマ）・「夢」（自分スピーチ）の五つの単元をベースに探究サイクルをつくり出すことで、探究を単なるイベントではなく学びのプロセスを大切にできることでマインドセットができ、社会で必要な力を段階的に高めることができます。

高校生は地域に貢献したいと考え、地域は若者の意見を取り入れたいと考えています。相手の事業者さん、行政の方にもどんどん入っていってその立場で考えていくことが地域との関係では必要です。これらの活動のエネルギーは、生徒の変容です。探究学習サイクルを通じて通常の体験が本物の体験となる中で、生徒の自己肯定感は高まり、生徒は主体的に自律し、社会貢献に目を向けていくようになります。その姿を見て、まわりの大人（教師、地域で関わる人々）も変容していきます。

当たり前を疑う、自問自答を繰り返す、目標設定に向けてチャレンジする、粘り強く前に進む…。これらはみな探究学習で必要な力です。よって、探究的に学ぶことで「論理的思考から予測、創造する力」「未来や社会をより良くしたいというグリット力」などを生徒は自ら獲得し、なぜ勉強するのか、学ぶ価値を持つことができます。生徒アンケートからは、「課題の原因や状況等を理解して、自分の考えを持つことができる」が93・5％、「自分の生活だけでなく、社会全体のことを考えたいと思う」が83・5％でした。

社会の変化のスピードは想像以上に速いです。今後の課題として、探究というプロセスを通じて身に付けた力と意欲を総合的に評価し、次のステージにどのようにつなげていくか。そして、生徒の意欲が高まっているが故に本物の体験の場を増やしていくこと、幼小中高大との情報交換、予算の配分やコーディネータの育成など、早急な対応が求められます。

静岡県立駿河総合高等学校
総合学科企画課 教諭
遠藤 健氏

えんどう・たけし　2018年 度まで、富士市教育委員会富士市立高等学校教育推進担当・指導主事として、同校に常駐。探究学習を具体化するカリキュラムを策定、実践し本年4月より現職

「探究のプロセス」を考える ―探究活動の実践を通して―

基調講演

トランジションを見据えた総合的な探究の時間

―SSHやSGH、課題研究とは目指すものが異なることを理解する―

今回、「総合的な探究の時間」に名前が変わりましたが、2008-9年に改訂された学習指導要領の中の「総合的な学習の時間」の中にそのポイントを見出すことができます。本日は、この探究に込められた意味合い、特に二つの視点からお話ししたいと思います。

何のための「探求」なのか 社会で求められるものを養う

一つは何のための「探究」なのかということです。前指導要領から「資質・能力」という言葉が強調されるようになりましたが、探究に限らず「主体的・対話的で深い学び」も「アクティブ・ラーニング」も結局ここにつながるのです。トランジションとは、ここでは学校教育を経て仕事社会への移行を指します。仕事・社会で求められるものを学校教育の中で養う、それを資質・能力の育成といいますが、これには、近年の学校教育の取り組みでは、仕事・社会につながらない。必ずしも円滑な移行につながっていないという反省があります。今、多くの若者は移行の困難の中にいるのです。

その背景の一つに雇用構造の問題があります。日本的な終身雇用、年功序列といった価値観が崩れ、離転職が一般化しており、大卒の3割が3年以内に離職、20代の終わりまでに5割ぐらいが離転職するという現実があります。かつての、いい高校、いい大学と、そしてより良い会社といった人生の方程式が機能しなくなってきたという現実を、私たちはそろそろ理解しないといけないのではないでしょうか。

AIも含めた情報化、グローバル化といった産業構造の変化に加え、日本は人口減少という大きな課題を抱えています。つい最近まで生産人口は8000万人でしたがあと10年で7000万人を切ってしまうという中、求められているのは、課題を見つけ議論し、新しいものを見つけていく能力を持った人です。新学習指導要領のターゲットイヤーは2030年。それまでに、縮小した日本にあって、さまざまな問題解決にチャレンジできる「探究のマインド」を持った多くの人材を、私たちは育てていかなければならないのです。

ポイントは「外化」 他者とのずれを通し学ぶ力を

もう一つは、探究だけを見ていてはいけないということです。SSH（※）とかSGH（※）、あるいは課題研究ですね。これまである一部の生徒、あるいはあるコースや学科の生徒になされてきたものとは違うという認識が必要です。もちろん取り組みの内実は同じですが、そこからつなげて見えてくるものが違います。簡単にいうと、習得活用をつなげながら探究をしないといけない。英、国、数、理、社をはじめとする教科の中で、主体的、対話的で深い学び、アクティブ・ラーニングをどれだけやりながら、探究も行うことができるか。ハードルは間違いなく上がっているのです。

アクティブ・ラーニング型授業とは、講義を「聴く」というインプットの学習形態の中にアウトプットの要素を入れていくものです。聴くだけではなくて、書く、話す、発表する。頭の中にある考えや理解を外に出していく。インプットに対するアウトプットの両軸をつくり出すというのがアクティブ・ラーニング型授業です。ポイントは「外化」。外化というのは、自分を外に出すということです。議論にちゃんと向かう生徒、めんどくさがる、話ができない、声が小さいなど、外化によってその人の持っている力が可視化されます。これが1年後も卒業後も、社会へ出てからも大して変わらなかったらどうなるでしょうか。

「君はそう考えるのかね」「そういう疑問があるのかね」同じ課題に対する他者とのやりとりの中、はみ出しやずれがたくさん出てきて、そのずれを通してまた学んでいく。そういう力こそが、これからの社会を変えていくことができるのです。

※SSH：スーパーサイエンスハイスクール：高等学校などにおいて、先進的な理数教育を実施し、高大接続の在り方について大学との共同研究や、国際性を育むための取り組みを推進する。また、創造性、独創性を高める指導方法、教材の開発などの取り組みを実施する。
※SGH：スーパーグローバルハイスクール：高等学校などにおけるグローバル・リーダー育成に資する教育を実施。それを通して、生徒は社会課題に対する関心や深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力などの国際的素養を身に付ける。将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図ることが目的。

学校法人桐蔭学園　理事長
トランジションセンター所長
桐蔭横浜大学特任教授
溝上 慎一氏

みぞかみ・しんいち　京都大学博士（教育学）。日本青年心理学会理事、大学教育学会理事、文部科学省中央教育審議会大学分科会専門委員など数々の要職を歴任。主な著書には、『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』、『高大接続の本質―「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題―』など多数

来場者との質疑応答

実践発表❷

学校外の力を活用した探究活動 地域の方々の協力が不可欠

近藤 哲史氏

商店や区役所と連携　地域の「困った」を解決

かつて横浜総合高校は、進路未定で卒業していく生徒が40％いたこともありました。つまり生徒の2・5人に1人は進路が決まらないまま卒業していたということです。それが、今年の3月には13％余りまで減りました。ここに至るまでの特徴的な実践をご紹介します。

一つは7年前、弘明寺商店街を擁する南区の大岡地区に校舎移転があったことをきっかけに始まった、新たな地域貢献活動です。商店街の清掃や夜間部の生徒による駅頭マナー啓発活動を地道に積み重ね、地域に受け入れていただくことができました。地域での活動は、キャリア教育の推進に大きな効果をもたらしました。

二つ目は、探究活動として「地域課題を解決する」PBL（Project-Based Learning）形式のカリキュラムを設定したことです。

途中退学や早期離職を防ぐことをテーマとして「コミュニケーションとプレゼンテーション」と題したこの授業では、商店街や区役所と連携し、さまざまな「困った」を探究課題として提供していただきました。この授業ではまず、対話的な学習の価値や協働的な学びのプロセスを重視し、学年の教員チームが徹底したアクティブ・ラーニング型の授業を行っていきます。その上で生徒たちは地域に出て行き探究活動を行います。活動成果の発表当日は地域の方々を招き、ポスターセッション形式で直接評価をしていただきます。自己肯定感を高め、生きる力を育むための、本校の探究活動のプロセスには、地域の方々の協力が必要不可欠のものとなっています。

横浜市立横浜総合高等学校
校長
小市　聡氏

横浜市立横浜総合高等学校
キャリア教育担当　教諭
近藤 哲史氏

実践発表❸

まちの未来づくりプログラム「市ケ尾ユースプロジェクト」

情報分析・発信、活用能力を育成

佐々木　神奈川県立市ケ尾高等学校は横浜市青葉区のほぼ中央にあります。文武両道の精神をモットーに、社会の中核たる人材を育成することを目指しており、約85％の生徒が現役で4年制大学に進学する普通科の高校です。ボランティア委員会を中心とした社会福祉活動も特徴の一つです。

川島　市ケ尾ユースプロジェクトとは、中高生と地域の大人が連携・協働し、まちの課題や魅力アップを考えることが目的です。青葉区役所、NPO法人「まちと学校のみらい」が主宰し、中高生の持つ問題意識や若いアイデアと、実際に地域で暮らしさまざまなスキルを持つ大人が力を合わせ、市ケ尾を良くしていこうというものです。

中高生合同オリエンテーションでは地域で活躍する大人の生の声を直接聞き、最もスタンダードな活動であるユースプロジェクトワークショップでは、いくつかのチームに分かれていろいろな視点からのまちづくりを行います。例えばチーム「まもる」では地域の危険スポットを調べその対策を考えました。まず、実際に生活している人から情報を集めるためにアンケートを行いましたが、多くの人が参加しやすいようにアンケート用紙も工夫しました。結果、公園に危険スポットが集中していることが判明しましたが、公園にある木々が視界を遮ることが原因の一つに浮かんできました。それらの課題を、木々を伐採し見通しを良くする、公園内の街灯は夜間常時つけておく。といった提言にまとめ行政に提出しました。本年度も、誰もが集まれる場所づくり、中高生の視点からの防災、みんなが楽しめるイベント、市ケ尾の魅力を発信する広報活動などを、チームを作り活動していきます。

本屋敷　市ケ尾高校は神奈川県教育委員会の「総合的な探究の時間」研究開発校に指定されました。総合的な探究の時間の3年間の目標として、①探究プロセスを通じコンピューターなどによる情報手段の効果的な活用法を育成する②地域等の外部資源を活用しながら、情報分析能力を育成する③体験活動、調査・研究、発表や討論などの学習活動を通して、情報発信および活用能力を育成する、の三つを掲げ取り組んでいます。市ケ尾ユースプロジェクトはまさしくその実践例として、多くの生徒・教員が探究のプロセスを学ぶ参考にしていきたいと思っています。

神奈川県立市ケ尾高等学校
総括教諭
本屋敷 隆裕氏

神奈川県立市ケ尾高等学校
3年生
佐々木 亜怜さん

神奈川県立市ケ尾高等学校
2年生
川島 駿作さん

神奈川県立市ケ尾高等学校：横浜市青葉区にある進学校、全校生徒1200人近い生徒が通う県内最大規模の県立高校。神奈川県教育委員会の「総合的な探究の時間」研究開発校

実践発表❹

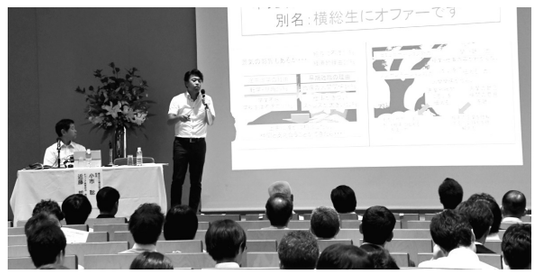
第一次産業体験による社会適応力の育成

小市　聡氏

さまざまな体験を通して、学校、地域、地方に目を向ける

横浜総合高校には複雑な背景を抱える生徒が多く、人間関係力や自己肯定感の低さなどが課題となっています。これらの生徒が社会適応力や社会参加意欲を身に付けて社会人としての生活が継続できるように、学校全体、ときには学校外の力を借りて取り組んでいます。その中に心のサポートである「ようこそカフェ」があります。毎週水曜日13時～17時に1階フリースペースを活用して若者支援団体などによる「交流相談カフェ」が開かれています。そこでは悩み相談、職への相談、軽食の無料提供などが行われており、毎回200人以上の生徒が参加しています。将来に役立つ体験としてのインターンシップや地域交流と貢献、第一次産業体験の募集もここで行われます。

また、さまざまな体験の場を通して社会適応力を養う取り組みの一つとして、岩手県釜石市（漁業）、福島県矢祭町（農業）、長野県上田市（果樹園）、山梨県道志村（林業）にて、第一次産業体験も行っています。生徒は地域課題提案や商品開発などを通して地方創生や学校地域の課題解決にも取り組み、さらに解決策を実践し、自己有用感や社会適応力を身に付けています。



横浜市立横浜総合高等学校：午前・午後・夜間の三部制定時制で、かつ単位制総合学科の市立高校。「キャリア教育」を学校の柱として「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」などの科目や地域と連携した取り組みを展開